JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES
JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

6期—5号

2005.03.10

CONTENTS ♣

はじめに／前野まさる　01
From the President / Masaru MAENO

2004年次第4回拡大理事会報告（12/10）／山田幸正　02
4th Meeting of the Executive Board, 2004 / Yukimasa YAMADA

日本イコモス国内委員会2004年次総会記録　04
General Meeting of JAPAN/ICOMOS, 2004

「伊藤延男先生を囲む会」ならびに「お祝いの会」　15
Tripartite Talk with Prof. ITO & the Celebrating Party

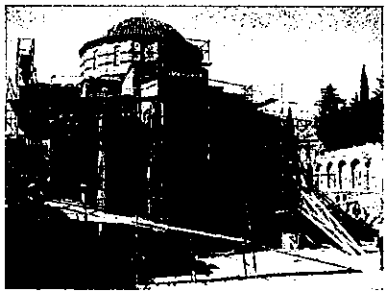
歴史的建造物の構造補強と解析に関する専門委員会　16
（ISCARSAH 2004）報告／花里利一
ICOMOS ISC, ISCARSAH 2004
（Analysis & Restoration of Structure of Architectural Heritage）
Riichi HANAZATO

高句麗古墳保存シンポジュームの報告／矢野和之　18
Symposium on Conservation for the Ancient Tombs in Kokuryo
Kazuyuki YANO

アジア・環太平洋地域文化遺産防災専門家会議報告／益田兼房　19
Specialists' Meeting on Cultural Heritage Risk Management in the Asian & Pan-Pacific Regions
Kanefusa MASUDA

お知らせ／赤坂　信　20
Announcement/Makoto AKASAKA

事務局日誌　22
Diary


ダフニー修道院

はじめに

前野まさる

2005年の幕開けは、12月26日スマトラ沖の大地震とそれのよって起きた大津波のニュース。正月のお屠蘇気分どころではありませんでした。被災国も9ヶ国15万人、いや1月末の報道では25万人とか。自然災害の恐ろしさ。予告無しに突然襲う自然災害。1995年1月17日の阪神淡路大震災から10年、地震、津波災害から如何に住民を救うかということで、1月19、20日の2日間、神戸で国連防災世界会議がユネスコ・イクロム・文化庁の共催で開催されました。この会議を挟んで14日から17日、21日には京都、姫路で日本イコモス・アジア環大平洋地域文化遺産防災国際会議が開かれ、この両会議をお世話したのが立命館大学歴史都市防災研究センターで、そのコアが益田兼房先生でした。会議でアジア各国から地震、水害の報告がありましたが、凄まじいものでした。今後、アジア特有の自然災害、台風、地震、津波、土砂崩れなどでアジア諸国の連係が必要となります。人命救助から文化遺産の防災・復旧の面で日本が果たす役割は大きいものがあると思います。こうした論議の場もつくりましょう。

2004年次第4回理事会（拡大理事会）報告

2004年次第4回理事会（拡大理事会）が去る2004年12月10日（土）午前11時から午後2時まで東京芸術大学美術学部第5講義室で開催された。
出席者は、委員長：前野まさる、理事：赤坂　信・稲葉信子・岡田保良・杉尾伸太郎・矢野和之・山田幸正・渡邊保弘、顧問：伊藤延男、本部副会長：西村幸夫、小委員会主査：藤井恵介、国際専門委員：杉尾邦江、荒木伸介、花里利一（日高代理）、大窪健之（益田代理）、事務局：水口　泉（陪席）の各氏で、報告事項および審議事項は以下の通りである。

報告事項

「2004年次総会資料」に基づき、以下の報告事項が確認された。

1．2004年次一般報告

臨時のものを含めて計5回の理事会（拡大理事会）が開催された。2004年次における入会者は本日、承認予定者も含め、個人会員で計10名、国内維持会員で1社、退会者は本日、承認予定者も含め、個人会員で3名であった。以上の通り、前野委員長より報告された。

2．国際専門分科委員会

1）**「歴史的庭園」** 10月23日にパリで開催予定の会議が再度、延期され、2005年2月11日～13日にベルギーのブラッセルに変更されたことが、杉尾伸太郎委員より報告された。

2）**「建築構造解析」** 10月21日～23日、ギリシアのアテネにおいて年次会議が開催され、日本のヴォーティングメンバーである日高氏の代理で花里が日本イコモス国内委員会から正式の派遣依頼をいただき出席した。2001年9月に採択された「指針」とその「グロサリー」の見直しと修正について日本での意見集約が求められている。次回は2005年5月か6月にスペイン・バルセロナで開催予定である。以上の通り、花里利一氏より報告された。

3）**「文化の道」** 10月1日～3日、スペインのフェロールで開催され、これに出席した。以上の通り、杉尾邦江委員より報告された。

3．担当理事報告

1）**会員担当**　前回理事会（9/25）以来、会員構成で規約の改正も含めて委員長・事務局および担当理事のなかで検討を進めてきた。本総会に上程し審議をお願いするつもりである。以上の通り、杉尾理事より報告された。

2）**広報担当**　本年度一年で合計4回のインフォメーション誌を発行し（第6期第1号3/1、第2号6/1、第3号9/20、第4号12/10）、会員全員に郵送した。以上の通り、山田理事より報告された。

3）**渉外担当**　本年度は委員長と事務局によって適切に対処され、さほどの問題もなかった。アメリカやオーストラリアなどから寄せられる情報をどの程度まで会員に流すかが検討された。以上の通り、稲葉理事より報告された。

4．会計報告および監査

国内維持会員の会費65万円によって、なんとか収支がトントンとなった。繰越金は昨年度の寄付金100万円を含めて146万円余りとなった。また、12月7日に澤田正昭監事に本会計報告を監査していただいた。別紙の「2004年次会計報告」をもとに以上の通り、矢野担当理事から報告された。

バッタリショウギ　イラスト(全て)／前野まさる

審議事項

1．入会者および退会者の承認

入会者（個人）

氏　名	所　属	推薦者
板谷直子	立命館大学歴史都市防災研究センター	上野邦一・益田兼房
山田利行	山田利行研究室	矢野和之・柳沢孝次

以上、これまでに申請のあった上記新規個人会員2名の入会について、資料を回覧し、かつ慎重に審議した結果、これを承認した。

退会者（個人）

氏　名	事　由
堀内清治	健康上の理由により

上記の申し出は2月16日付けの会費振込み書に記載されており、審議が大幅に遅れたが、これを承認した。

2．小委員会の存廃

前回理事会（9/25）において協議された各小委員会の今後の活動について審議した。

第1小委員会：小委員会内部で現在検討していることがあり、継続していきたい。また、委員の再編成を考えている。以上の通り、藤井主査より発言があり、これを承認した。

第2小委員会：来年度からの活動予定がないとの羽生主査から回答があり、前野委員長より当該小委員会の廃止が提案され、これを承認した。

第3小委員会：今後は関連の国際専門分科委員会（ISCARSAH）を中心に活動していくとの日高主査からの回答があり、前野委員長より当該小委員会の廃止が提案され、これを承認した。

第4小委員会：このところ世界遺産については関心が非常に高く、また懸案も多くあるので、今後は研究会等を積極的に企画していきたいとの考えており、継続していきたい。また外部からの参加を募っていきたい。以上の通り、稲葉主査より発言があり、これを承認した。

3．アジア環太平洋地域文化遺産防災専門家会議

ユネスコ世界遺産センター、イクロム、文化庁の主催による「国連防災世界会議」にあわせて、2005年1月14日から21日まで開催予定の表記会議を日本イコモス国内委員会の主催で行ないたい旨の依頼が、大窪健之氏（益田委員の代理）よりなされた。会員全員に告知するよう求める意見などがあったが、これを承認した。

4．CIAV2004会議の報告書の出版と会員への配付

先般愛媛県で行なわれたヴァナキュラー建築の会議（CIAV 2004 in Ehime）の報告書を出版する予定であり、これを日本イコモス国内委員会で買い上げ、会員全員に配付したいとの前野委員長からの提案があり、審議の結果、これを了承した。

5．ICOMOS本部の最近の動向

西村本部副会長から最近の本部の動向について、以下のような情報が寄せられ、若干の協議を行なった。

◆韓国がICOMOS本部に職員をこの12月から2年間派遣することになった。おそらく高句麗遺跡の問題に関連するのではないだろうか。また来年の総会の本部役員選挙において韓国は執行委員候補を出すとの情報がある。

◆最近のユーロ高のため、ドル建てで入金される会費収入に問題が生じている。ユーロ圏からは、ユーロ建て（40EU）の会費とする案が出されたが、否決された。

◆この5月に、ガッゾーラ賞と名誉会員の推薦がある予定である。準備しておく必要がある。

◆来年の総会の日程は、10月17日から21日と決まった。テーマは“Setting”であり、カルチュラル・ルートが大きなトピックになりそうである。

（文責：山田幸正）

日本イコモス国内委員会2004年次総会記録

日本イコモス国内委員会2004年次総会が去る2004年12月10日（土）午後2時20分から午後4時45分まで東京芸術大学美術学部第5講義室で開催された。出席者は22名、会員諸氏からの委任状104通で、定足数（会員の半数）123を上回り、総会は成立した。
議事は委員長の司会により、1）報告、2）審議の2部にわけて進められた。

報告事項

1．2004年次一般報告

この1年はさまざまなことがあり、とても忙しい1年であった。先ず、本年3月、石井昭顧問がブルガリア国プロヴディフ市より名誉市民の称号を授与された。これは日ブ共同のプロヴディフ旧市街保存修復事業に対する石井氏の熱意と功績を高く評価されたものである。第5小委員会の現地会議もあった。4月には、イランのバムの会議、釜山と蜜陽で日韓朝鮮通信使の会議。5月にはCIAV委員長のマハット氏を迎えCIAV会議の打合せ、彦根での理事会、考古と石の会議、危機遺産会議の始動、紀伊・熊野古道の世界遺産登録承認。7月には北京でICOMOSアジア太平洋地域会議、9月にはノールウェ・ベルゲンでの執行・諮問委員会議、姫路での理事会。10月にはスペイン・フェロールで文化の道会議、愛媛県でのICOMOS-CIAV 2004会議、スタネーバ女史のブルガリア建築保存の講演会。この一年を振り返り、日本イコモス国内委員会の組織と活動の概況について報告する。（委員長・前野まさる）

1）理事会

今期（2004年～2006年）の理事会は1997年次総会の合意を踏襲して、理事・監事・顧問だけでなく、小委員会主査、ICOMOS本部役員、さらに本年より国際専門分科委員会委員にも参加いただき、「拡大理事会」として活動してきた。

本年、拡大理事会は本日のものを含めて以下の計5回開催した。第1回3月21日（恵比寿文化財保存計画協会）、第2回6月5日（彦根市）、臨時7月24日（恵比寿文化財保存計画協会）、第3回9月25日（姫路市立日本城郭センター）、第4回12月11日（東京芸術大学）である。それぞれの報告についてはJAPAN ICOMOS INFORMATION誌第6期第1～4号に掲載されている。

（委員長・前野まさる）

2）会員

2004年現在のICOMOS本部登録会員は245名、国内維持会員12社である。2004年次の理事会は10名の個人会員と1社の国内維持会員の入会申込と3名の退会届（内1名ご逝去）を受理・承認した。この件については本総会において承認（追認）をお願いする。

（委員長・前野まさる）

3）国際専門分科委員会

現在ICOMOSには21の専門分科委員会が設置されているが、日本イコモス国内委員会からは、このうち16の委員会にVOTING MEMBERおよびASSOCIATE MEMBERを送っている（委員のリストはJAPAN ICOMOS INFORMATION誌末尾　参照）。

（1）「土」の委員会

委員会としての正規の会議ではないが、4月17日～20日、イランで震災を受けたバムの復興のためのワークショップが開催され、これに岡田が参加した。

（委員・岡田保良）

（2）「法規・行政・財政」委員会

今年の法律・行政・財政問題委員会会議は、建造物保存の財政的問題に関して、5月にブルガリアで開催された。案内が届いたのが3月であり、すでに河野の予定はいっぱいであったため、出席がかなわなかった。河野はここしばらくユネスコで条約・勧告起草作業に携わることが多く、時間的に委員会に出席がかなわず、昨年のパリに引き続いて2度目の欠席となった。次回は是非出席したいと考える。ちなみに来年はベルギーで考古学に関連したテーマで開催予定であり、再来年は河野の主催により、わが国で、文化的景観と無形的側面に関する会議を開催する予定である。

（委員・河野俊行）

（3）「石造物」の委員会

6月27日から7月2日まで、スウェーデンのストックホルムにおいて第10回石造文化財の劣化と保存に関する国際会議が開催されました。この石造文化財の劣化と保存に関する国際会議は、1972年にフランスのLa Rochelleで第1回が開催され、その後、ギリシャ、イタリア、ポルトガル、スイス、ポーランド、ドイツなどヨーロッパの国で開催されてきました。1982年には一度、米国で開かれたこともあります。現在、石造文化財の劣化と保存に関する研究者の集まる国際会議として、とても重要なものになっています。この会議には、日本から国士舘大学の西浦忠輝と私が出席しました。会議には、33カ国から240名の参加がありました。会議は、次の6テーマに分けて行ないました。テーマ1－Material structures, properties and deterioration（33件の発表）、テーマ2－Conservation method and products（35件）、テーマ3－Techniques and tools for conservation investigation（15件）、テーマ4－Documentation（10件）、テーマ5－Case studies, ethical considerations in conservation（26件）、テーマ6－Conservation and restoration of plasters in monuments（15件）、すべて合わせると134件の発表があり内容も充実していました。これらのテーマの他に、ベルギー王立文化財研究所のEddy De Witte博士が中心になり、石造物の撥水剤処理(water-repellent treatment)に関するワークショップも開催され、石造文化財の撥水処理に関する成功事例、失敗事例、長所、短所に関して活発な意見交換がなされました。またこの期間中にICOMOSの石造物専門委員会専門委員会の定例委員会も開催されました。

会議の開会式には、ストックホルム市長の挨拶があり、またレセプションは、ノーベル賞受賞者の晩餐会の開催される市庁舎の黄金の間といわれるホールで行なわれました。また、会議の夕食会は、グスタフ2世の治世に建造され17世紀初めに海底に沈んだヴァーサー号を展示しているヴァーサー号博物館で船の横で開催されるなど、Marie Klingspor Rostein氏を会長とするICOMOS Swedenの力の入れようには驚きました。

この会議の空き時間を利用して、石造物専門委員会（ISCS）が開催されました。委員会では、ISCSで作成中の石造文化財の劣化と保存修復に関する用語集（Glossary）の内容を中心に議論がなされました。この委員会も大変アクティブで、市庁舎のホールのレセプションが開かれている時も、別な建物で開催されたのですが、日本からのメンバーを含めて多くのメンバーは、ノーベル賞を受賞する以外は、ここのホールで夕食会に参加できないと聞き、市庁舎のレセプションに参加しました。大変タイトなスケジュールでしたが、有意義なストックホルムでの国際会議でした。（委員・石崎武志）

（4）「考古遺産管理」委員会

考古遺産管理運営国際委員会(以下ICAHMと略す)の2003年次総会は、2003年6月24日にアメリカのWashington,D. C. で開催された。この会議の骨子は、JAPAN ICOMOS / INFORMATION Vol.6, No.1, p.17-18, 2004.3.1刊を参照されたい。ここではそれ以後のICAHMの現況を要約して報告する。

継続する活動の重点　2003年の年次総会で確認された活動の重点は要約すると次の4点に絞られていた。

つまり、

1）Heritage at Risk (担当責任者Marilyn Truscott, Australia)

2）Heritage and Development (Tom Wheaton, USA)

3）ICAHM Charter Review (Gustaf Trotzig, Brian Fgloff)

4）Ename* Charter Review (Willem Willems, Dirk Callebaut, Belgium)

*（これはベルギーの東フランドル地方のユニークな中世考古学の遺跡地の名前である）

Heritage at Risk: regional report　具体的でわれわれと関連の深い1）は2003年の年次総会でICAHMのなかにHeritage at Risk Sub-committeeが正式に認められた。世界各地の情報収集を体系化する目的で、世界を10地域に分け、担当の責任者を決めて各地域のHeritage at Riskの年次報告を求める企画がスタートした。担当のMarilyn Truscottからの要請を受けて、東アジア（小野昭・岸本雅敏）、東ヨーロッパ（Zbigniew Kobylilnski, Poland）、西ヨーロッパ（Christopher Young, U.K.）、北アメリカ（Christophe Rivet and Ellen Lee, Canada）は担当

者がすでに決まっていた。

われわれは、指示された分量の原稿を提出期限の2004年6月7日に送った。担当地域の考古遺跡の個別事例報告でなく、Heritage at Riskの類型や傾向を記してほしいとの条件が付いていた。そのため焦点を絞り、日本では原因者負担による大規模な記録保存調査が徹底している反面、資金さえ用意すれば社会的な批判をあまり浴びることなく、合法的に遺跡が破壊される危機的な状況があることを、一つの構造的類型として簡潔に報告した。だが、これは調査もせずに破壊されるのに比べれば、遺跡保護の優れた一面であることを評価しての話であることは言うまでもない。(JAPAN ICOMOS / INFORMATION Vol.6,No.3, p. 2-3. 2004.09.20刊参照)

2004年11月30日時点で，扱いがどうなったかM. Truscottに念のため問い合わせたところ、未刊行とのことであった。報告が未だ来ていない東ヨーロッパと北米の2地域と合わせ、何らかの形で印刷する予定であることを確認した。

2004年の年次総会　9月にフランスのリヨンで開催された「考古学者ヨーロッパ協会」(EAA)(9月8日・9日)の初日にあわせて開催された。筆者らは都合がつかず欠席した。事務総会だけでなく、開発と考古遺産の管理運営に関するセッションも設けられていただけに残念であった。

プログラムには「副会長の報告」の項目があり，事務局長のCh. Rivetから特に報告がある場合は事前の提出が求められた。小野は副会長職にもあるので上記Heritage at Risk in Japanの内容と、2005年10月に予定されているICOMOS北京総会時には、こうしたテーマで特に中国、韓国、ロシアなどと連絡をとる必要を報告した。2004年次総会ではこれをプログラムの中に入れるとの連絡を受けた。リヨン年次総会の議事録はまだ届いていないので具体的な議論があったか否かは未確認である。

(委員・小野　昭/岸本雅敏委員)

(5)「文化の道」委員会

会議概要　CIIC 2004年度の会議はFERROL, SPAINにて10月1、2、3日の3日間スペインの北西端に位置する軍港都市FERROLで行なわれた。事前に全メンバーに開催通知、会議出席要請、全員の会議での研究成果の発表、報告が義務づけられていた。又事前に旅費等の補助の必要性を申告し必要な参加者には旅費の支給がされた。但し全員の会議期間中の滞在費(ホテル代)食事代及びマドリッド～FERROL間のバス移動費は事務局負担とされた。世界各地の国からのメンバーの参加があり、発表者は21人で、アフリカから3人、アジアからインド、スリランカ、日本(筆者)の3人、イスラエル、U.S.A,スペイン、ブルガリア各一名の他は南米各国からの参加であり南米色が濃かった。会議はスペイン文化省、フェロール市、ガリシヤ州のサポートを受けて行なわれた。

会議のテーマ

1) 各国に関連するCultural Routesの同定、研究報告発表及びリストアップの報告

2) Cultural Routesに関連した、城塞、港湾都市に関する研究、リストアップ

3) 貿易ルート、巡礼路等に係る規制と土地利用

4) 特別グループによる文化的ルート憲章ドラフトの検討と修正作業

以上4) 以外のテーマで21件の報告と発表があった。また、ミーテイングの合間にCIIC憲章第3次ドラフトの検討、修正がスペイン語、フランス語、英語の3カ国語に同時翻訳しながらであり時間を要したが精力的に行なわれた。

会議において以下のことが検討、同意された。

1) CIIC及びメンバーによって作成された研究成果、結果や資料のデータベース化されたもの等の積極的活用

・これらの国際的な活用の促進

・これらを引き続き整備すること

・メンバーはCIICの活動に勢力的に参加し、協力的に積極的に行動しなければCIICのメンバー資格を逸する事を認識すること

2) CIICのメンバーで初期段階で以前各国内イコモス委員会の推薦でメンバーとなった中に機能していないメンバーもいる。異なった国家間でのメンバーのバランスも必要であり、旧委員会のメンバーも新委員会のメ

ンバーも両者相応の活動を期待する

3) メンバーは常にCIICの定めた定義に基づく専門的研究成果を常に発表しなければならない

4) 以下のアソシエイツメンバー及びボーテイングメンバーとして申請のあった6名を新しくメンバーとなる事が認められた。

(1) チェコスロバキア推薦のIvan P.Muchka氏については資格ありと認めメンバーになる事に同意する。

(2) アメリカ合衆国推薦のPaul DanielMarriott氏については実績も豊富でありメンバーとして認める。

(3) ペルー推薦のFernando Roosas Moscoso氏はペルー国内委員会会長よりボーテイングメンバーとして推薦された。今後CIICの活動に対して多いに期待されるので承認する。

(4) メキシコ委員会のDolores Pineda氏はメキシコイコモス委員会のメンバーであり、ボーテイングメンバーであるメキシコのFrancisco Lopez Moralesの推薦により同じくボーテイングメンバーとして認める。

(5) スペインイコモス国内委員会はJuan Antonio Rodriguez-Villasante（Ferrol大会の組織委員）氏を研究部門での働きを期待してメンバーとなる事で推薦しこれを認める。

(6) ウルグアイ委員会はMariella Russi氏を推薦する。既に研究部門で活躍しており、メンバーとして認める

アルゼンチンのCarlos Pernaut氏から来年3月にアルゼンチンの世界遺産Quebrada de Humahuaca内で小規模なCIICの特別会合を開く事が提案され認められた。

Mr Pernauto氏からイコモスでのエグゼクティブコミッティーでAndean "Camino de Inca" を引き続き6つの国の共有のプロジェクトに決定した旨報告があった。此れに係る次回のワーキングミーティングは11月の予定。

次回中国での総会に特にCultural Routeがメイントピックスの一つになるよう働きかける事で同意された。

Cultural Routeに関する関心が高まり、このテーマで更に多くの会合が国際的、国内的に開催されている。又世界遺産に登録されている遺産のカテゴリーや此れに対する審査の混乱、矛盾が生じているとみられる事。イコモスとしてはこれに対して正当に対処しなくてはならない。国際的社会風潮に対しても、イコモス専門委員会で討議研究された専門的技術を用いる事を励行していかなくてはならない。

かねてより、城塞都市及びカルチュラルルートの国際研究センターの設置が要望されていたが、この度イコモススペイン国内委員会はFerrol市と協定を結び"Torrente Ballester"及びサンフェリ城内に研究所を設置した、この調印式が会期中にCIICメンバーの立ち会いで行なわれた。市長及びCIIC会長のマリアローザの間で調印された。資料収集、展示、研究用のオフィス、研究機器等が整備された。研究所は世界中の研究者、イコモス会員に開放される。またフランス、チエコ、ルクセンブルグ、オランダ、ベルギー、アメリカ、ドイツ、スペイン、などの城塞関連研究機関との連携によって運営される。

（委員・杉尾邦江）

（6）「民家」委員会

10月12日～17日に愛媛県松山市、大洲市、宇和町、内子町などで開催され、前野まさる、赤坂　信、石井昭、伊藤延男、大野　敏、福川裕一、本田智子、宗田好史、山田幸正、山村高淑の各氏が参加した。詳しくは、JAPAN ICOMOS INFORMATION誌第6期第4号参照。

（委員長・前野まさる）

（7）「建築構造解析」委員会

2004年10月21日～23日に、ギリシア・アテネにおいて、歴史的建造物の構造補強と解析に関する専門委員会(ISCARSAH)の年次会議が開催された。今回のアテネ会議では、ISCARSAHの年次会議に合わせて、ギリシア文化省との共催による国際ワークショップが開催された。各国の委員約25名が出席した年次会議では、ISCARSAHによって提示されている「建築遺産の構造修復・保存と解析に関する指針」の普及状況や内容について討議が行なわれたほか、今後の委員会の開催や活動について話し合いがなされた。指針については各国語に翻訳し、指針に対する意見をISCARSAHに報告し、今後、修正していく方針である。さらに、専門委員会のメンバーでアクロポリスおよびダフニイ修道院の修復現場を見学した。次回は、2005年5月頃にスペイン・バ

ルセロナで開催される。なお、本委員会の活動期間は3年間で、今回は3年目なので、次回からは体制を改めて行なう。同時に行なわれた国際ワークショップのテーマは、①構造修復と解析に関する指針及びイコモス国際憲章、②耐震補強設計、であり、ギリシア国内から多くの出席者があった。

（委員代理・花里利一）

（8）「歴史的庭園」委員会

10月23日にパリで開催予定の会議が再度、延期され、2005年2月11日～13日にベルギーのブリュッセルに変更され大野・杉尾が出席することとなっている。

（委員・杉尾伸太郎）

（9）「ロックアート」委員会

2004年11月28日から12月2日まで、インド北中部の観光都市、アーグラーで開催されたロックアートの国際学会（正式名称はRASI 2004 --- International Rock Art Congress）に出席した。この学会は、RASI (Rock Art Society of India)が主催し、IFRAO (International Federation of Rock Art Organizations)がその第10会大会に指定したものである。IFRAOとは世界各国のロックアート研究組織を糾合したもので、本部はオーストラリアのメルボルンにある。1988年に設立され、その後毎年のように世界各地で、地元国の研究組織による主催というかたちで、世界中からのロークアート専門家を集めている。今年度はインドの番となり、代表的世界文化遺産であるタージ・マハルを擁する観光地でもあるアーグラー市のホテルで開催されたが、インド人以外の出席者は予想よりは少なく、60人程度であった（通常は100人を超えることが多い）。アジアからは、サウジアラビアやアゼルバイジャンから複数の研究者が来ていたが、日本を含む東アジアからは報告者一人だけだった。インドからは後述するように、ロックアートの専門家だけでなく、隣接諸分野の研究者がやはり60人程度集っていた。

学会の第1の目的は、もちろん世界各地における最先端の研究を発表することであり、報告者も、理論的な内容を論じる発表と、日本と北東アジアの事例を紹介する発表の二つを行なった。イコモス関係では、インド中部の都市、ボーパール市南方の山岳地帯にある「Bhimbetka（ビンベットカ、あるいはビーマベトカ）のロックシェルター群」が昨2003年度に世界文化遺産に登録されたばかりであり、この学会自体が、それを記念する目的も持っていたようである。個々に確認していないので、数はわからないが、何人かの有力なCAR (Comit d'art rupestre)メンバーも参加していた。ビンベットカには既にインド人以外の研究者も調査に入っており、RASIを中心に大きなプロジェクトが動いているとの印象を持った。

ビンベットカを中心としたセッションもあり、そこでは、ほとんどがインド人研究者による広範な分野からの発表があった。作品や遺跡そのものを研究する考古学的な研究から、自然環境に関する発表もあり、また、バッファゾーンに居住する先住民の人類学的、社会学的、教育学的な問題もそれぞれ専門家によって報告され、さらに、インドの文化財保護の法体制に関する発表もあり、多岐にわたっていた。ビンベットカは、インドにおいてもまだ一般的に認知されているとはいいがたいが、この広大な遺跡群に関係するインド人研究者の熱意には打たれるものがあった。

学会終了後、インド人以外の参加者による大規模なビンベットカ遺跡群等の見学エクスカーションが実施され、報告者も3日間の日程ではあったが、参加することができた。ビンベットカ遺跡群は広大な地域にわたっており、まず、一般公開もされているメインの地域を見学したが、自動車等の進入が規制されており、入り口に管理人が常駐しているようであった。遺跡の近くのところにも管理人小屋があり、24時間体制で管理が行なわれているようで、その遺跡管理体制には感銘を受けた。家族連れや引率された生徒たちも訪れていて、ボーパール市付近では広く知られているという印象を持った。ボーパール市北東には、やはり代表的世界文化遺産である「サンチーの仏教建造物群」もあり、報告者はこれも訪問することができたが、このような世界文化遺産認識のもとビンベットカに対しても理解が深まっているのだろう。その後、ビンベットカでも一般の見学を認めていない部分の遺跡群の見学も認められ、

この世界的にも大規模で、質量とも豊かなロックアート遺跡群に親しむ機会が得られたのは、幸いであった。

（委員・小川　勝）

(10)「文化遺産防災」委員会

2004年7月に北京で開催されたアジア太平洋地域イコモス会合で、文化遺産防災に関するこの地域での会合を、各国持ち回りで毎年1回開催することが採択された。これを受けて、2005年1月神戸で国連防災世界会議が開催されるのを機会に、1月14日から21日までの日程で「日本イコモス国内委員会アジア環太平洋地域文化遺産防災専門家会議」を開催する。経費は国際交流基金・京都市・立命館大学歴史都市防災研究センター等が負担して、同センターが事務局となって行なう。日本イコモスからは前野委員長の出席をいただき、土岐憲三立命館大学教授など本分科会のメンバーが中心的な役割を果たす。一方、国連防災世界会議は、今回初めて文化遺産防災をテーマとして取り上げ、ユネスコ世界遺産センターが中心となってイクロム・文化庁の3者が主催者となる。経費はユネスコと立命館大学歴史都市防災研究センターが負担し、海外参加者16名を含む両方の会議事務局を同センターが一括して行なうことで、一体的な運営を行なう。会議成果の報告書は、英文で海外で長く購入できることを目指しており、総合的な防災対策の形成に役立つことを期待している。なお、16日午後の公開フォーラム（京都市岡崎の京都会館）、19日午前と20日全日のパブリック・フォーラム（神戸市ポートアイランド国際会議場）には、会員各位のご参加を期待したい。

（委員・益田兼房）

(11)「測量・文献」委員会

予定されているＣＩＰＡの会議としては、3D-ARCH'2005、3D Virtual Reconstruction and Visualization of Complex Architectures、22-24 August, 2005, Mestre-Venice Italy がありますが、小生自身は出席する予定はありません。

XX Symposium of CIPA は Torino, Italy で 27 September to 1 October 2005 の予定です。この会議では、2001年にベルリンで開催することを計画した際に、2年に一度開催する国際遺跡探査学会（ISAP=International Society for Archaeological Prospection）と連動させて、同一場所で両者の会期を連続させてはどうか、という提案がありました。しかし、常に同一場所で会期を連続させることは、ISAPの方の選択の自由度が失われるという理由から、協力を図ることは見合わせたという経緯があります。

しかし、CIPAの2005年のイタリアでの開催が9月27日から10月1日迄で、ISAPの方はローマで9月14日から同17日迄という予定になっております。偶然の決定である可能性が大きいのですが、10日の間隔で開催される会議の両方へ出席することは、何かと繁多な職務から見て難しく、ISAPの方のみへの出席を考えております。

上記のように、小生、従来からCIPAの方への出席もできず、大変心苦しく思っております。どなたか代わりの方に代表になっていただくように、お願いできないでしょうか？

（委員・西村　康）

4）広報関係

これまでと同様、本年もまた、事務局とともに広報活動の面で力を注いだのは、JAPAN ICOMOS INFORMATION 誌の定期的な発行を通じて、会員全員に対して、理事会や事務局の活動状況などをできるだけ速やかにお伝えすることであった。本誌において、年度末の総会報告、各回の理事会や研究会の報告、イコモス本部執行委員会などの報告、国際専門分科委員会や小委員会の活動報告、日常の会務を記録した事務局日 誌、各種の情報などを掲載した。

[JAPAN ICOMOS INFORMATION] 誌　過去1年間に第6期第1号（3月1日）、第2号（6月1日）、第3号（9月20日）、第4号（12月10日）と、計4回発行し、全会員に郵送した。理事会の議事内容を報告することを第一義に、毎回、理事会開催前の発行をめざしてきたが、本年度はいずれもなんとかその期日に間に合わすことができた。これはひとえにお忙しいなか、原稿を期日までにお寄せていただいた方々によるところが大きいと痛感している。この場を借りて深く御礼申し上げる。ま

た、それぞれの総ページ数については、1号28ページ、2号16ページ、3号16ページ、4号24ページと、国内委員会総会の報告などの1号とヴァナキュラー建築の愛媛会議の特集となった4号でややページ数が増えたが、通常時の2号および3号では当初の目標の16ページに納まった。誌面の内容は、上述した総会・理事会や小委員会などの諸報告、事務局日誌、各種案内等がその大部分を占めたが、第1号では、杉尾邦江氏「カルチュラル・ルート国際専門委員会（CIIC）の活動報告」、小野昭氏・岸本雅敏氏「考古遺産管理運営国際専門委員会（ICAHM）の2003年の動き」、岩崎好規氏「UNESCO/ICOMOS　第2回バーミヤン遺跡保存専門家グループ会議報告」、第2号では益田兼房氏「無形および有形の文化遺産に関する沖縄宣言について」、第3号では西浦忠輝氏「石造物国際専門委員会（ISCS）報告」、石崎武志氏「第10回石造文化財の劣化と保存に関する国際会議参加報告」、矢野和之氏「世界遺産蘇州古典園林・拙政園に隣接する蘇州博物館建設計画について」など、国際専門委員会および関連の国際会議など国内外における文化遺産やその保存などをめぐる多彩な活動や話題を掲載した。とくに第4号は、本年10月に愛媛県で開催されたヴァナキュラー建築の国際専門委員会（CIAV）の年次大会および国際会議の様子について、前野まさる氏や大野敏氏などの実行委員ばかりでなく、国土交通省四国運輸局長や大洲市長などの開催関係者、チェスター・リーブス氏など海外からの参加者などからの感想や意見を掲載し、一つの特集号となった。

（理事・山田幸正）

2．日本イコモス国内委員会2004年次会計報告（2003年12月8日～2004年12月7日）および監査

「日本イコモス国内委員会2004年次会計報告」が矢野担当理事よりなされた。澤田正昭監事により会計監査された本報告は、先の一般報告とともに、承認された。

日本イコモス国内委員会　２００４年次会計報告（2003/12/8～2004/12/7）

1．繰越金	普通預金		1,543,696 円
2．収　入			2,370,000 円
	会員費		
	98 年～2003 年分	220,000 円	
	2004 年分	2,090,000 円	
	2005 年分	60,000 円	
	維持会員		650,000 円
	普通預金利息		10 円
	定期預金利息		3,025 円
	事業収入		0 円
	研究参加費		0 円
	寄　付　金		0 円
	雑　収　入		4,000 円
	合　　計		3,027,035 円
3．支　出			
	ICOMOS 本部年会費（40$/人×238 人）		1,020,254 円
	会議費（総会・理事会・他）		41,519 円
	研究会費		0 円
	[INFORMATION]誌　編集・印刷費（4 回）		838,374 円
	通　信　費		312,439 円
	事務用品費		50,583 円
	事　業　費		0 円
	事務局人件費		722,120 円
	旅費滞在費（マハット氏 CIAV 会議下見）		103,636 円
	講　師　料		10,000 円
	慶　弔　費		5,250 円
	合　　計		3,104,175 円
4．残　高	普通預金（繰越金＋収入－支出）		1,466,556 円
5．基　金	定期預金（イコモス研究振興基金）		12,550,000 円

以上の通り報告します。2004 年 12 月 7 日

会計担当理事　矢野和[illegible]　渡邊保弘

会計監査欄

2004 年 12 月 7 日

監事 澤田正昭

審議事項

1．新規入会者および退会者の承認

理事会は2004年中に下記の通り10名の個人および1社の入会と、3名の退会を承認した。

入会（個人）（敬称略）

氏　名	所　属	推薦者
（第1回拡大理事会　3月21日）		
野老正昭	野老設計事務所代表取締役	前野まさる・矢野和之
勝部　昭	（財）島根県文化振興財団事務局長	町田　章・斉藤英俊
西　和彦	文化庁文化財建造物課	苅谷勇雅、・矢野和之
（第2回拡大理事会　6月5日）		
黒田乃生	筑波大学助教	斉藤英俊・日高健一郎
足立裕司	神戸大学教授	前野まさる・矢野和之
（臨時拡大理事会　7月24日）		
山村高淑	京都嵯峨芸術大学助教授	前野まさる・矢野和之
大窪健之	京都大学大学院助教授	土岐憲三、益田兼房
（第3回拡大理事会　9月25日）		
岩本由美子	日本ユネスコ協会連盟教育文化事業	前野まさる・矢野和之
（第4回拡大理事会　12月11日）		
板谷直子	立命館大学歴史都市防災研究センター	上野邦一・益田兼房
山田利行	山田利行研究室	矢野和之・柳沢孝次

以上、これまでに申請のあった上記新規個人会員2名の入会について、資料を回覧し、かつ慎重に審議した結果、これを承認した。

入会（国内維持）

社　名	代表者	推薦者
（第2回拡大理事会　6月5日）		
京都科学	片山　保	前野まさる・矢野和之

退会（個人）

氏　名	事　由
（第1回拡大理事会　3月21日）	
CHESTER LIEBS	アメリカ帰国のため
（第3回拡大理事会　9月25日）	
石川忠臣	2004年6月2日ご逝去
（第4回拡大理事会　12月11日）	
堀内清治	健康上の理由により

2005年の年初に上記入会者（個人）および退会者の登録および抹消をICOMOS本部に申請する。

以上について、承認された。

2．2005年次活動方針

1）活動全般

先の10月のICOMOS-CIAV2004会議でも、7月のアジア太平洋地域会議でも、ヨーロッパの力が強くICOMOSではアジアの影が極めて薄い。アジア地域の活力を何とか引き出す方法を考えたい。日本では国内会員それぞれは活発な活動をしているのだが、イコモスの場にその活力がみられない。アジアのことを云う前に日本の足下を固める手だてを考える努力を会員諸氏と力を合わせて取り組んでいきたい。

（委員長・前野まさる）

2）広報担当

2005年次においても、これまで通り、［JAPAN ICOMOS INFORMATION］誌を年4回程度、定期的に発行し、総会・理事会の報告、国内委員会が主催・後援する研究会、講演会、シンポジウムなどを中心に、その告知や報告、さらには事務局の会務記録などを、会員諸氏にお伝えしていきたいと考えている。特に、来年度は中国・西安でのICOMOS総会が予定されており、このイベントを中心に、文化遺産やその保存をめぐる活発で多様な話題が掲載できるものと期待している。また、日本イコモス国内委員会のホームページの立ち上げについても、いくつか解決しなくてはならない困難はあるものの、本件は今どき避けては通れぬこととして、その道筋をつけたいと考えている。これからも、ひろく会

員の皆さんのご理解とご協力をいただきながら、広報活動を展開していきたい。

（理事・山田幸正）

3）庶務・会計担当

2004年度は、会費収入の他、目立った収入がありませんでしたが、維持会員の会費が65万円あり、2003年度の寄付収入100万円は手をつけずに済んでおります。これからもっと維持会員を増やしていくことが必要で、皆様のご協力をお願いしたいと思っております。

世界遺産であるケルンの大聖堂周辺の開発が問題視され、2004年の世界遺産委員会で危機に瀕する遺産として登録されました。先進国の文化遺産で、遺産そのものの危機ではなく周辺の景観問題で危機遺産に登録されたことは、我が国にも少なからず影響を与えるのではないかと考えられます。そこで、国内の世界文化遺産の現状について日本イコモス国内委員会としてもきちんと把握しておく必要があるのではないかと考えます。このため、その調査に係わる旅費等の確保をするために、いくつかの団体に援助を求めていく所存です。目途がつき次第、いろいろな専門分野の会員の方を募って、年に1～2回の調査ミッションを派遣したいと考えています。

（理事・矢野和之）

4）小委員会

第1小委員会（憲章）：小委員会内部で現在検討していることがあり、継続して活動していきたい。また、委員の再編成を考えている。（主査・藤井恵介）

第2小委員会（事業）：当該小委員会を廃止する。

（委員長・前野まさる）

第3小委員会（構造）：今後は関連の国際専門分科委員会（ISCARSAH）を中心に活動していくこととなり、当該小委員会を廃止する。（委員長・前野まさる）

第4小委員会（世界遺産）：このところ世界遺産については関心が非常に高く、また懸案の多くあるので、今後は研究会等を積極的に企画していきたいとの考えており、継続して活動していきたい。また外部からの参加を募っていきたい。（主査・稲葉信子）

第5小委員会（日本・ブルガリアイコモス共同事業）：日本ブルガリア両国イコモス国内委員会の共同企画に基づく「プロヴディフ旧市街保存地区内文化財建造物修復事業」（略称：Ancient Plovdiv Conservation Project）は、「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」（UNESCO/Japan Trust Fund）から999,738米ドルの供与を保証され、2003年10月以降3年間の予定で実施段階に入った。第5小委員会（発足：2001年9月、現委員：石井　昭・金原保夫・麓　和善・前野まさる・矢野和之）は理事会と緊密な連携を保ちつつ、引き続き当事業に関わる諸般の実務を担当する。

［事業計画］　要点を記せば次の通り。

（1）対象は旧市街保存地区内にある19世紀中期の木造家屋8棟で、いずれもプロヴディフ市の所有に属し、7棟が国指定、1棟が市指定の重要文化財である。うち、Georgy Klianty's House等4棟には3年計画で本格修理を、Nicola Nedkovich's House等4棟には1年計画で応急修理を施す。（2）事業者は家屋の所有者たるプロヴディフ市であり、主としてその任務を果たすのは旧市街管理事務所（Ancient Plovdiv Directorate）である。ただし、設計監理者の選定と施工業者の選定に当たっては、プロヴディフ市のほか、文化省、国立文化財研究所、ユネスコ、日本ブルガリア両国イコモス、等の各代表が参加する委員会（Ad Hoc Committee）を設ける。（3）事業の主財源は年次ごとにユネスコから送付される日本信託基金である。ブルガリアの国や公共団体から提供される施設・人材・情報資料・等には原則として対価を支払わない。

［活動方針］　当小委員会の2005年次活動方針はおおよそ次の通り。

（1）ブルガリアイコモスの理事会のもとにある同種小委員会（現委員：T.Krestev, H.Staneva, V.Todorov, A.Tokmakchiev の各氏）と連帯して Bulgarian-Japanese ICOMOS Joint Working Group の活動を一層拡充する。事業の全期間にわたり、両国が保有する知識や経験の交流を図りつつ、調査研究、企画立案、指導助言、記録作成、学生・若手専門家のトレーニングなど、多様な実務に関与することになろう。（2）年間3回を目途に Joint WG の「現地会議」を開く。2005年次第1回会議（3月下

旬－4月上旬を予定）では、『重要建造物計8棟の本格修理・応急修理に関する基本方針』『当プロジェクトの実施過程に関するジェネラルガイドライン』『建築系・美術系学生の現場研修に関する実施要項』など、既に審議に入っている数種の文書を完成させ、関係者に配布できる態勢を整えたい。（3）現地会議に続いて2日間程度のワークショップを開催する。最初に予定されているのは『日本の文化財建造物保存工事に適用されている実務指針』の紹介とこれを巡る討論である。また、可能ならば日本でもワークショップを開きたい。10月に中国で開催されるイコモス総会の前か後が適当な時期ではないかと考えている。（4）WGの現地会議とは別に、年間1回、ユネスコ・日本外務省を含む全ての関与機関から代表が出席する「国際調整会議」が開催される予定で、当小委員会からも1～2名が出席する。我々は旅費節減の観点から、その時期をWGの第2回現地会議に合わせるよう提案している。（5）当小委員会の活動については、当然ながら、逐次、理事会（拡大理事会）に報告するとともに、その意見を求める。会員の皆様にはJAPAN ICOMOS INFORMATION誌を通じて適切な情報が届くよう努力したい。

（主査：石井　昭）

3．日本イコモス国内委員会規約改正について

現行の日本イコモス国内委員会規約の第23条の一部を下記のように改正したい旨の提案が、杉尾伸太郎副委員長よりなされた。

現行　第23条

日本委員会はイコモスの個人会員のうち、特に日本委員会の発展に寄与した者を、理事会の議をへて、顧問とすることができる。顧問は、会費の納入を必要としない。

2　顧問のうち、長期間委員長の職にあり、その功績がきわめて顕著な者に、総会の決議により、名誉委員長の称号を贈呈することができる。

改定（案）第23条

日本委員会はイコモスの個人会員のうち、特に日本委員会の発展に寄与した者を、理事会の議をへて、顧問とすることができる。

2　顧問のうち、その功績がきわめて顕著な者に、総会の決議により、名誉会員の称号を贈呈するとともに、第14条に基づきイコモスに対しイコモス名誉会員候補者として推薦を行なう。

この提案に対して、活発な議論が行なわれた。そもそも国内委員会の規約はICOMOS本部執行部の承認が必要であること、規約の「名誉委員長」はICOMOSの活動に多大な功績があり日本イコモス国内委員会を創設された故関野　克先生だけを想定されたものである、「顧問」は理事会のために助言をしてくれる人を理事会が選出する任期つきの職である、顧問と理事会の基本的な関係を考えるべきである、規約改正という重要事項を事前に告知せずに総会の議事次第とすることは行き過ぎている、等の意見が出された。

こうした意見に対して、総会欠席者にもこの件に関する成否の投票を行なうこと、ICOMOS本部執行部に承認をもとめること、そのために規約の発行日を考慮することなどの条件をつけた上で、下記のような改正案が再度、提出された。

改正　第23条

日本委員会はイコモスの個人会員のうち、その功績が極めて顕著な者に、総会の決議により、日本イコモス国内委員会名誉会員の称号を贈呈することができる。

2　日本委員会は名誉会員のなかから、理事会の議をへて、顧問を選任することができる。

審議の結果、本総会において議決するには、上述のように充分な議論が尽くされておらず、事務局から発送した議事次第から漏れていたこと、出席者が2/3以上に達していないことから、本件を再度、理事会等に差し戻して協議し直すこととした。

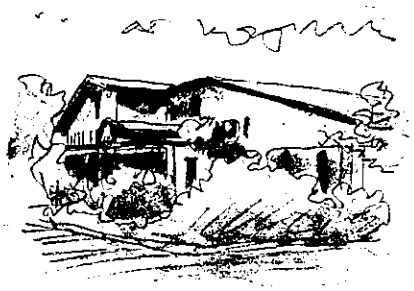
4．日本イコモス国内委員会2005年次予算

次のような「日本イコモス国内委員会2005年次予算」が矢野理事より提案された。

一部、字句の訂正の後、これを承認した。

1．繰越金	普通預金	1,466,556円
2．収　入		
	2005年分会費	2,400,000円
	未納分会費	470,000円
	団体・維持会員費	1,000,000円
	普通預金利息	0円
	定期預金利息	3,000円
	事業費等収入	0円
	寄　付　金	0円
	雑　収　入	0円
	合　　計	3,873,000円
3．支　出		
	ICOMOS本部負担金	1,100,000円
	会　議　費	100,000円
	研究会費	100,000円
	渡航費補助	0円
	印　刷　費	900,000円
	事務用品費	250,000円
	事　業　費	0円
	事務局人件費	750,000円
	合　　計	3,600,000円
4．残　高		
	（繰越金＋収入－支出）	1,739,556円
5．基　金		
定期預金（イコモス研究振興基金）		12,550,000円

（文責：山田幸正）



「伊藤延男先生を囲む会」ならびに「お祝いの会」

「日本イコモス国内委員会2004年次総会」に引き続き、午後5時より5時45分まで、同所（東京芸術大学美術学部第5講義室）において、文化功労者に顕彰された伊藤延男先生を囲んでの座談会が開催された。稲葉信子氏を進行役に、途中から西村幸夫氏も加わり、文化庁時代、イコモス立ち上げから本部副委員長時代など、貴重な経験談を中心に話が展開し、事前の総会が予定より延びた関係上、時間的な制約があったことがたいへん惜しまれるほどであった。

その後、会場を上野公園内の上野精養軒宴会場に移し、午後6時から午後7時半まで「お祝いの会」が行なわれた。イコモス関係者を中心に各界から総計31名の方々の参加を得て、たいへん盛会であった。

（撮影 上下共に：渡邊保弘）

歴史的建造物の構造補強と解析に関する専門委員会(ISCARSAH 2004)報告

大成建設技術センター　花里利一

1. はじめに

2004年10月21日から23日まで、ギリシア・アテネにおいて、歴史的建造物の構造補強と解析に関する専門委員会(ICOMOS International Scientific Committee for Analysis and Restoration of Structures of Architectural Heritage)の年次会議が開催されました。委員会メンバーの日高教授（筑波大学）が大学業務のため出席できないということで、代理ですが、日本イコモス国内委員会から正式の派遣依頼をいただき、委員会に出席してきました。この委員会は1996年に第1回が開催され、以後、毎年開催され、今回のアテネ会議は第9回になります。現在、専門委員会の委員長はローマ大学のProf. G. Croci、事務局はイギリスのDr. Yeomans、運営グループは日高教授を始め6名、ヴォーテイング・メンバー26名、アソシエイト・メンバー約20名で構成されています。委員会メンバーはヨーロッパが多く、今回の会議の出席者（約25名）も大多数がヨーロッパで、中近東から数名、米国・カナダから二人ずつ、東アジアはおそらくわずかにひとり（日本）でした。今回のアテネ会議では、ISCARSAHのメンバーによる専門委員会とともに、ギリシア文化省（Hellenic Ministry of Culture）との共催による国際ワークショップも合わせて開催されました。このワークショップのテーマは構造修復・保存と解析に関する指針および耐震補強設計で、ギリシア国内から多くの研究者・技術者らが国際ワークショップに参加しました。また、専門委員会のメンバーで、世界遺産の修復状況を視察しました。アクロポリスおよび1999年の地震で被害を受けたダフニイ修道院の修復現場を見学しています。

2. 建築遺産の構造修復・保存と解析に関する指針について

専門委員会（ISCARSAH）では、建築遺産の構造修復・保存と解析に関する提案（Recommendation）をまとめています。この提案は、基本的な保存の理念を示す『原則（Principle）』と手法や規則を示す『指針（Guideline）』から成り立っています。『原則』はイコモスの総会で承認された国際憲章なので、専門委員会の決定で改訂することはできませんが、『指針』の修正・変更は可能ということです。『指針』には、用語を説明する『グロッサリー（Glossary）』も付いています。『指針』は2001年9月の委員会で採択され、2003年に改訂されています。

『指針』は以下の目次です。

1. 一般的なクライテリア
2. データの収集：情報と調査
3. 構造挙動
4. 診断と安全性評価
5. 構造被害、材料劣化と修復方法

（付録）　語彙解説（グロッサリー）

ところで、ISCARSAHの方針で、各国委員により『指針』の翻訳と普及が進められています。すでに、イタリア、ポルトガル、スペイン、メキシコ、ルーマニア、ギリシアなどで翻訳されており、昨年12月には中国語にも翻訳されています。次回の委員会では、『指針』と『グロッサリー』の見直しと修正を議題とすることになりました。今回の委員会には間に合いませんでしたが、次の委員会までには、日本語に翻訳するとともに、日本イコモスとしての意見を集約しておく必要があります。（『指針』をチェックの結果は1月中旬までにISCARSAH事務局に送ることとなりました）　今回の委員会での指摘は、『指針』にメインテナンス及び周囲の環境が抜けていること、ISOとの整合性はあるか、などです。グロッサリーについてもワーキング・グループをつくって検討することになりました。

3. 今後の委員会の開催と活動について

次回のISCARSAHは2005年5月か6月にスペイン・バルセロナで開くことが決まりました。2006年は南アフリカが候補になっています。2008年は総会がカナダで開催されるのに合わせてカナダで開きたいとカナダの委員は話していました。2007年は中国か日本で開くことが期待されています。一部の委員は日本開催を強

く推していました。なお、今回のアテネ会議では、宿泊等の滞在費はギリシア文化省が負担しています。

次回のミーティングでは新しい委員会が発足することになります。これは、ISCARSAHは3年間を一つの活動期間としているからです。メンバーもチェックも行なわれ、多少の入れ替えがありますが、委員長を選出して、活動方針を決めることからスタートになります。現委員長のProf. Crociによれば、次のステップとして、具体的なプロジェクト（例えば、アンコール・ワットの構造修復)での提案(Scientific Recommendation)を考えたいようです。

4. 国際ワークショップ

10月21日はPresentation of the international charter of ICOMOS for the analysis, conservation & structural restoration of architechtural heritage & discussion on the text of guidelines、10月22日はInternational workshop aseismic design of structural intervention on monumentsのテーマで行なわれ、約150名の参加者がありました。

4.1 建築遺産の構造修復、保存、解析に関するイコモス国際憲章と『指針』の内容の検討

計4セッションで行なわれ、1st sessionでは、Prof. G. Croci（委員長）による『指針』の内容の解説、Dr. A. Miltiadou（ギリシア文化省）によるギリシア語への翻訳とダルフィ修道院の解析例の紹介、Dr. D. Yeomans（事務局）による『指針』の各国レベルでの翻訳・普及の状況の紹介がありました。2nd sessionおよび3rd sessionでは、Prof. P. Tassios（アテネ工科大学）ほか、ギリシア国内参加者による、『指針』に対する意見、アクロポリスの修復状況の紹介などがありました。4th Sessionでは、全体討論が行われ、近代建築や教育の問題、歴史と構造の接点など学際的なアプローチの話題などについてデイスカションが行なわれました。

そのなかで『指針』は、共通のstarting pointであり、各国の建物・気候に合わせて展開すること、安全指標も各国レベルで評価することが推奨されました。安全性を評価するには構造をよく理解すること、そのためには、構造計算は必須であり、データが揃ってきた現在、可能になってきているという認識も示されました。さらに、新築建物の設計基準を建築遺産の構造補強設計に用いるのは適切ではないというコメントもありました。

4.2 耐震補強設計に関する国際ワークショップ

1st Round Tableのテーマは、「構造補強設計における地震荷重の設定の基本的な問題」でした。Prof. Tassios(アテネ工科大学)からは荷重レベルには最適解があり、モニュメントとしての価値、人命と機能性の価値、コストなどを関数とするGlobal Benefitを最大にするように選択する方法が示されました。また、ほかのギリシア人研究者からも、人命の安全、材料構造、使用性などと荷重レベルの関係についての質疑があったほか、いくつかの修復事例の紹介もありました。Prof.Crociが指摘したように、構造解析は現象を単純化するが、実現象は複雑であり、それをどのように近づけるかがクリテイカルな問題であることも構造研究者が認識する必要があると思います。その他、荷重レベルの設定における再現期間の取り扱いについて問題点が示されました。2nd Round Tableのテーマは 耐震補強設計の規準でした。発表では、組積造は、減衰特性などの面でRC造やS造と違うこと、オリジナルの材料や構造を尊重すべきであること、構造補強には旧来の方法とともに免震などの新しい技術もあること、などの意見が出されました。また、イタリアの新しい耐震基準も紹介されました。Final sessionは、ワークショップのまとめとして、Prof. TassiosやProf. Crociらの話がありました。構造解析は定量的ですが、歴史的価値は定性的です。Prof. Crociは、"What I propose is to compromise between quantitative and qualitative."と表現しています。

5. 歴史的建築物の修復状況の視察

22日午前中、委員会メンバーでアクロポリスの修復現場を視察しました。現在は、西側のプロピライアやアテネ・ニケ神殿と北側の列柱の修復などに取りかかっているところです。

23日の委員会終了後、世界遺産ダフニイ修道院の修復状況を視察しました。この建築は11世紀に再建されたもので、ドームをもつビザンチン様式の教会堂です。貴重なモザイク画も残されていることでも有名です。1999年の地震で大きな被害を受けて、現在、ギリシア文化省のもとで修復工事中です。鋼材を使った構造補強とともに経年変位や地震の観測も行なっています。

6. パルテノン神殿の耐震研究その後

ライトアップされたアクロポリスを眺めながらのディナーではよい雰囲気で楽しく過ごすことができました。筆者がパルテノン神殿と出会い、その後、世界遺産建築の構造研究に携わるようになったのは、1980年代後半の大学在職時に、教授やギリシア人留学生らとパルテノン神殿の耐震研究を行なったことに始まります。『地盤条件や地震動のことをふまえた上で、個々の建物の構造的な特徴をよく把握することが肝要であり、もともと有している耐震的な長所をできるだけ活かす耐震補強法の立案が望まれる』ことを学んだ研究でもあり、自身にとっては原点というべき建築です。今回の旅行では、約10年ぶりに、アクロポリスの丘に立ち、修復関係者と話すことができました。かつて技術面での責任者であったDr. C.Zambasは代わっていましたが、修復事務所で会った技術者の人も筆者の研究のことを知っており、チタン合金のダボを使った補強を見て、多少のお役に立ったのかもしれません。今後もフォローしていきたいと思っています。

高句麗古墳保存シンポジュームの報告

文化財保存計画協会　矢野和之

10月25日から28日にかけて韓国ソウル市において、世界遺産に登録された高句麗古墳の保存に関するシンポジュームが、ユネスコ文化遺産部と韓国イコモス国内委員会の共催で行なわれた。日本からは、昭和女子大教授の増田勝彦氏と高句麗壁画古墳の保存状態を調べに2度訪朝している私とが参加した。ユネスコのブシュナキ氏、イコモス委員長のペチェット氏、ヨーロッパ、中国、そして韓国の美術史、保存科学、修復、環境調査などの専門家が集まり、発表と討議が行なわれた。残念ながら北朝鮮（朝鮮人民民主主義共和国）からの参加はなかった。

現在、ユネスコ文化遺産部では薬水里古墳と徳興里古墳を対象として科学的調査を開始している。この中間報告や、高句麗壁画古墳の現状と課題（矢野）、中国のシルクロードの壁画保存、高松塚古墳やキトラ古墳の壁画古墳の保存管理（増田）、新羅時代の壁画古墳、イタリア・タルクイニイの墓地の壁画環境、中国の高句麗時代の遺跡の保存などが発表された。

私の発表の要旨は以下の通りである。

高句麗古墳保存の現状と課題

高句麗時代の古墳には、石室内に壁画を有するものと有しないもの、ラテンネンデッケ（三角持ち送り構造）と迫持ち式のドーム構造など、いろいろな形式がある。このなかで、保存上特に問題になるのは、壁画を伴うものである。また、壁画についても石に直接描かれたものと漆喰に描かれたもの、その漆喰層の構成も様々である。日本には、前者のものに九州の装飾古墳、後者に奈良盆地にある壁画古墳がある。中国の漢時代・唐時代の壁画古墳、さらには新疆ウイグル自治区や中央アジア、インドの石窟寺院の壁画がある。

このなかで保存技術上極めて、難しいのが、日本と朝鮮の壁画を有する古墳である。それは、多くの壁画が乾燥地帯にあるのに対して、湿潤な気候の地域の壁画は風化劣化をもたらす水分の影響を大きく受けるからで

ある。

石に直接描いた安岳3号墳は、塩類の析出が見られ、徹底的な保存のための調査が必要である。江西大墓・中墓は比較的良好であるが、今後の管理如何では予断を許さないであろう。漆喰に描かれた徳興理古墳では、漆喰層の剥落止めなどを行なっているが、かなり古い施工であるので、再度最新の器材で調査し、対策を練る必要がある。日本の援助で環境調査器材を取り付けたが、そのデータの分析も必要である。

また、壁画だけでなく安岳3号墳を初めとして、石室そのものの保存対策も必要である。世界遺産登録を機会に総合的保存対策検討組織を国際的につくり上げるのがよいと思われる。

現在主にヨーロッパの専門家が、高句麗壁画古墳の調査をしているが、高松塚の壁画保存が難しいように、湿潤な気候の地域の古墳の壁画、特に漆喰に描かれた壁画の保存は極めて難しいといえる。特に黴の問題については慎重に対処しなければならない。この点で日本や韓国の専門家の参加が、政治的に困難な面もあろうが必要とされるのではなかろうか。

ICORP 活動報告
「日本イコモス国内委員会アジア・環太平洋地域文化遺産防災専門家会議」の開催

ICORP日本代表・立命館大学歴史都市防災研究センター　益田兼房

2005年1月、阪神淡路大震災10周年を記念して第2回国連防災世界会議が神戸で開催されました。11年前の第1回横浜会議では、文化遺産はテーマにも取り上げられませんでした。今回は政府国際機関会合分科会の一つとして、1月19日に「ユネスコ・イクロム・文化庁-文化遺産危機管理」が開催でき、イコモス会議はこれと連携して15日から20日まで京都・姫路・神戸で開催されました。日本イコモスからは、前野まさる委員長には終始ご出席をいただき、文化遺産防災国際分科会（ICORP）のメンバーである土岐憲三・小林正美・大窪健之各委員と村上裕道委員にはご発表をいただき、また公開会議には伊藤延男顧問等多数ご参加頂きました。これらの一連の会議は、ユネスコ・文化庁・国際交流基金・京都市・立命館大学COE・NPO等の資金的援助を頂き可能となったもので、その準備から運営までのすべてを、立命館大学COE「文化遺産を核とした歴史都市の防災に関する研究拠点」歴史都市防災研究センターで担当頂きました。関係の各位に厚く御礼申し上げます。詳細は4月刊行予定の英文議事録に譲りますが、概要を報告します。

1．参加者

ユネスコ：世界遺産センターアジア太平洋地域担当課長ジョヴァンニ・ボッカルディ他、イクロム：集落保存担当教授ジョセフ・キング、文化庁：文化財部建造物課長苅谷勇雅、同課長尾充主任調査官他、国際イコモス：事務総長ディヌ・ブンバル（ICORP委員長）、ICORP事務局長ロビン・リデット、ICORP米国ランドルフ・ランゲンバック、各国イコモス等専門家：日本・韓国・中国・タイ・インドネシア・インド・スリランカ・ネパール・パキスタン・イラン・モロッコ・ケニア、以上合計28名。

2．日程と会議概要

1月14日：参加登録。15日：世界遺産「古都京都の文化財」の清水寺と緩衝地帯の産寧坂伝建地区の防災施設等見学、各国事例報告発表。16日：午後に京都国際シンポジウム「文化遺産と歴史都市を災害からどう守るか」開催、京都宣言採択。17日：世界遺産「姫路城」の防災設備等見学、4つの作業部会開催。18日：国連世界防災会議分科会のための予備討論。19日：国連世界防災会議のパブリックフォーラムと分科会開催、勧告文採択。20日：国連防災世界会議パブリック・フォーラム参加。21日：海外参加者帰国。

3．主要な成果

◆国連防災世界会議の全体結論である兵庫宣言に、文化遺産の防災の重要性が書き込まれ、今後の国際的あるいは国内的なこの分野の政策形成の根拠が世界的にできたこと。

◆文化遺産防災に関する従来の宣言等の蓄積の上にたって、今後のネットワーク形成の重要性など新たな国際合意を、ユネスコ・イクロム・イコモスが関わって築けたこと。

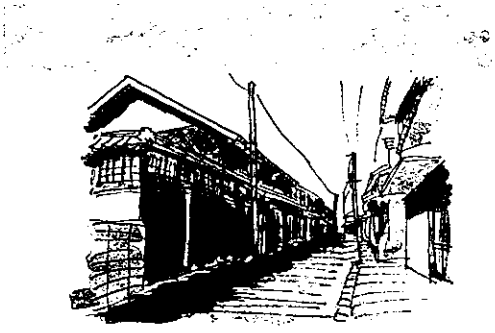
◆日本の文化遺産の個別の火災対策等への国際的な高い評価を得るとともに、京都などの木造都市にある世界遺産等については地震火災対策が必要なことが国際的に認識されたこと。

◆文化遺産防災に関する大規模な国際専門家会議が成功したことで、今年のイコモス総会でもICORPの前進が可能となったこと。

4．内外の評価

ユネスコ事務局長松浦晃一郎氏は、国連防災世界会議のパブリック・フォーラムで、文化遺産防災の重要性を強調し、今後のユネスコの活動でも重視する方向を打ち出しました。イコモス事務総長ディヌ・ブンバルは、今回の一連の会議の成果として、文化遺産と周辺環境の関係の理解について、単に従来からの景観的観点だけでなく防災という危機管理の観点から捉えることで、社会的・歴史的・持続社会的な視点から新しい地平を切り開いたこと、と評価しています。これは、今年10月に開催の中国西安でのイコモス総会でのテーマが「文化遺産の保護と周辺環境」であることから、特にタイムリーと評価しており、6月に開催する韓国でのイコモス会議に、日本イコモスの文化遺産防災国際分科会ICORPからの参加を要請したい、と言っています。

また、朝日新聞は国連防災世界会議の成果8項目のうち4番目に文化遺産防災の勧告の採択を挙げて高い評価を与え、産経新聞・京都新聞・神戸新聞等も大きく報じました。



お知らせ

2004年12月26日に起きた大規模な津波による災害について

ICOMOSタイやICOMOSスリランカなどから現地の深刻な状況が報告され、ペツェットICOMOS会長はじめ、オランダ、オーストラリア、スペイン、アメリカなどの国のICOMOSのメンバーや代表から哀悼の意が述べられ、ICOMOSの今後の果たすべき役割について多くの提案がされた。

5th General Assembly and Scientific Symposium of ICOMOS in Xi'an(China), 17 to 21 October 2005 / CALL FOR PAPERS(抜粋)

SCIENTIFIC SYMPOSIUMのメインテーマは:

Monuments and sites in their setting - conserving cultural heritage in changing townscapes and landscapes

INSTRUCTIONS FOR SUBMITTING ABSTRACTS

The scientific symposium is open to ICOMOS members and non-members alike. All abstracts received by 15 April 2005 will be considered by a specially appointed Scientific Committee for inclusion in the Scientific Symposium program. Authors will be informed by 1 June 2005 whether their paper has been selected and on the time they have been allocated for their presentation. The decision of the Scientific Committee is final. Selected authors will be invited to supply their full paper by 30 July 2005, so that it can be included in the Symposium Proceedings CD-Rom. Full details on the format in which full papers should subsequently be supplied is available on the web site.

Abstracts Deadline: 15 April 2005

Format: 200 words, in English, French or Chinese, sent preferably by e-mail, giving: the name; full postal address (including telephone, fax and e-mail); short curriculum vitae of the author, the title of the paper and indicating under which of the 4 sub-sections the paper falls, and if applicable, the National Committee of which you are member. Chinese abstracts should be accompanied by a translation into English

or French.

Financial support: Limited financial support may be available for authors of selected papers from countries facing financial difficulties. Should your ability to attend depend on financial support please state so clearly in the cover letter accompanying your abstract giving reasons and the support you would require.

POSTERS

Participants are also welcome to contribute posters on the Scientific Symposium theme. To contribute to this poster exhibition please send the following details to the Organizing Committee by 15 April 2005: name and contact address of the author(s), theme of the poster(s), size and number of the panels. Authors of selected posters will be informed by 1 June 2005.

Abstracts and information on posters should be forwarded by e-mail to the following address: ccch@xauat.edu.cn

Contacts: Luo Yili and Liu Caihong

Conservation Centre of Cultural Heritage

Architecture School

Xi'an University of Architecture & Technology

13 Yanta Road, Xi'an City, Shaanxi Province, 710055

People's Republic of China

Tel: + (86 29) 8220 2091

Fax: + (86 29) 8552 7821

Please only use this address for matters related to abstracts and papers.

日本イコモス会員の皆さまへお知らせ

ICOMOS 40周年記念事業のために写真資料そのた映像資料を送るよう求めてきましたので、ご紹介いたします。

For the attention of all the ICOMOS National and International Scientific Committees

copy to Executive Committee

Subject: Special presentation on the 40th anniversary of ICOMOS

Please send photographic/film material with captions/explanations in English or French (preferably by e-mail in jpeg format) by 30 March 2004 to the following address. Please only send copies and not originals ! :

B. Szmygin

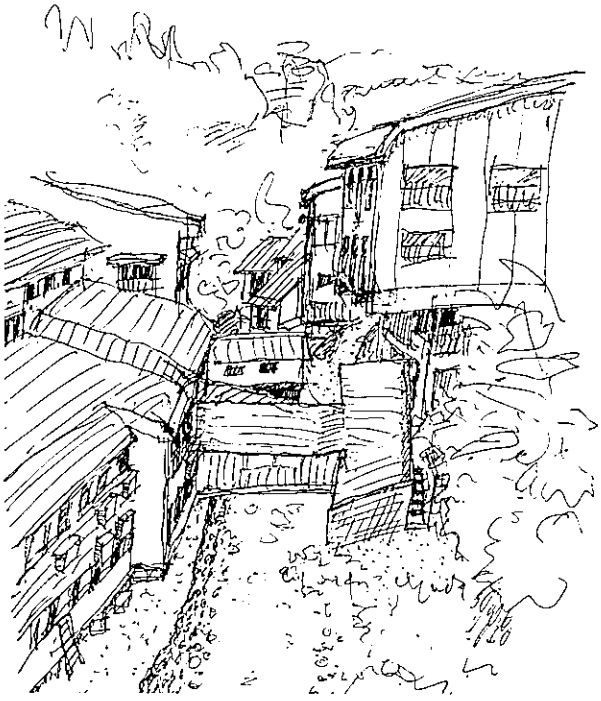
Email: szmygin@poczta.onet.pl

Lublin University of Technology

ul. Nadbystrzycka 40

20-618 Lublin, Poland

（赤坂　信）



日誌　事務局

（2004年11月15日～2005年1月23日）

2004年

11/22　(財)ユネスコ・アジア文化センター　文化遺産保護協力事務所より「文化遺産ニュース」October 2004 vol. 11を受領

12/1　UNESCOより“THE WORLD HERITAGE news letter” 46. September-October 2004を受領

12/6　US/ICOMOSよりNewsletter number3-third quarter of 2004を受領

12/11　日本イコモス国内委員会2004年次 第4回拡大理事会、2004年次総会、「伊藤延男先生を囲む会」を東京藝術大学美術部第5講義室にて開催、終了後、お祝いの会・懇親会を上野精養軒にて開催

12/14　鞆の浦 龍馬ゆかりの家「魚屋萬蔵宅」保存修復補助金の贈呈式　アメリカンエキスプレスよりNPO鞆町づくり工房に、西村幸夫ICOMOS副委員長、前野日本イコモス国内委員会委員長出席

12/18-19　バーミヤン仏教遺跡保存修復に関する国際会議（於：東文研）

12/19　ICOMOS Pezet委員長歓迎会（於：東京ドームホテル）

12/23　［JAPAN ICOMOS INFORMATION］第6期4号を発行
維持会員を含む全会員及び関係団体に順次送付

2005年

1/12　(社)日本ユネスコ協会連盟より「ユネスコ」2005 1. vol. 1095を受領

1/15-18　京都・姫路で国連防災世界会議関連事業として「日本イコモス国内委員会アジア環太平洋地域文化遺産防災専門家会議」が行なわれた
16日、京都では京都国際シンポジウム「文化遺産と歴史都市を災害からどう守るか」をテーマに開催された
17日、京都会議参加者は姫路に行き姫路城の防災施設の視察をした

1/19-20　神戸にて「文化遺産を災害から守るために」と題し、パブリックフォーラムが国連防災世界会議の一セッションとして開催された

1/22-23　第19回「大学と科学」公開シンポジウム『人類の歴史を護れ一戦中、戦後における文化遺産の保護と国際協力一』が開催される（日本イコモス国内委員会後援）

1/22　ICOMOS事務総長Dinu Bunbal歓迎会（於：有楽町　炉端本店）

日本イコモス国内委員会　維持会員（代表者）

株式会社　尾田組（尾田芳信）
株式会社　総合計画機構（糸谷正俊）
株式会社　乃村工藝社（乃村義博）
株式会社　文化財保存計画協会（矢野和之）
大成建設株式会社（葉山莞児）
西武建設株式会社（松下和徳）
株式会社　鴻池組（大岩祥一）
株式会社　都市環境研究所（矢嶋啓自）
株式会社　プレック研究所（杉尾伸太郎）
「国宝松本城を世界遺産に」推進委員会（有賀　正）
株式会社　トリアド工房（伊藤民郎）
株式会社　京都科学（片山　保）

（順不同）

日本イコモス国内委員会の活動には以上の企業のご支援をいただいております。

●日本イコモス国内委員会　理事会　JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	前野　まさる	Masaru MAENO
Vice President	副委員長	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
		町田　　章	Akira MACHIDA
Secretary General	事務局長	矢野　和之	Kazuyuki YANO
Trustees	理　事	赤坂　　信	Makoto AKASAKA
		稲葉　信子	Nobuko INABA
		岡田　保良	Yasuyoshi OKADA
		小野　　昭	Akira ONO
		河野　俊行	Toshiyuki KONO
		田中　哲雄	Tetsuo TANAKA
		西浦　忠輝	Tadateru NISHIURA
		濱崎　一志	Kazushi HAMAZAKI
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		益田　兼房	Kanefusa MASUDA
		宮川　朝一	Asaichi MIYAKAWA
		山田　幸正	Yukimasa YAMADA
		渡邊　保弘	Yasuhiro WATANABE
Auditors	監　事	沢田　正昭	Masaaki SAWADA
		西谷　　正	Tadashi NISHITANI
Advisors	顧　問	石井　　昭	Akira ISHII
		伊藤　延男	Nobuo ITO
		坪井　清足	Kiyotari TSUBOI

小委員会　WORKING GROUPS

Chiefs	主　査	藤井　恵介	Keisuke FUJII
		羽生　修二	Shuji HANYU
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		稲葉　信子	Nobuko INABA
		石井　　昭	Akira ISHII

●国際諸委員会参加者　REPRESENTATIVE TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Vice President	西村　幸夫	Yukio NISHIMURA
Advisory Committee	前野　まさる	Masaru MAENO
Specialized Committee on:		
Archaeological Management	小野　　昭	Akira ONO
	岸本　雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
Analysis and Restoration Structures of Architectural Heritage	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
	坂本　　功	Isao SAKAMOTO
	西澤　英和	Hidekazu NISHIZAWA
Historic Towns and Villages	福川　裕一	Yuichi FUKUKAWA
	上野　邦一	Kunikazu UENO
Underwater Cultural Heritage	荒木　伸介	Shinsuke ARAKI
Training	稲葉　信子	Nobuko INABA
	工楽　善通	Yoshimichi KURAKU
Historic Gardens and Cultural Landscapes	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
	本中　　眞	Makoto MOTONAKA
Vernacular Architecture	前野　まさる	Masaru MAENO
	大野　　敏	Satoshi OHNO
Wood	村上　裕道	Yasumichi MURAKAMI
	伊藤　延男	Nobuo ITO
	渡邊　保弘	Yasuhiro WATANABE
Earthen Architecture	岡田　保良	Yasuyoshi OKADA
Cultural Tourism	宗田　好史	Yoshifumi MUNETA
	石井　　昭	Akira ISHII
Legal Issues	河野　俊行	Toshiyuki KONO
Photogrammetry	西村　　康	Yasushi NISHIMURA
Cultural Routes	杉尾　邦江	Kunie SUGIO
Stone	西浦　忠輝	Tadateru NISHIURA
	石崎　武志	Takeshi ISHIZAKI
Risk Preparedness	益田　兼房	Kanefusa MASUDA
Rock Art	小川　　勝	Masaru OGAWA

JAPAN ICOMOS INFORMATION

Vol.6, No.5 10 MARCH 2005

日本イコモス国内委員会　委員長　前野まさる

事務局担当理事　矢野和之　　編集　山田幸正

〒150-0021　東京都渋谷区恵比寿西1-9-6　アストウルビル3階

株式会社　文化財保存計画協会　気付

Tel & Fax .03-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp

JAPAN-ICOMOS OFFICE

c/o Planning Institute for the Conservation of Cultural Properties

Asutouru Bldg.,1-9-6 Ebisu-nishi Shibuyaku Tokyo 150-0021, Japan

Tel & Fax .+81-3-5728-1621 e-mail jpicomos@kb4.so-net.ne.jp